

美術科教育学会通信 NO.35

1999年12月17日発行

学会事務局 〒640-8510 和歌山市栄谷930 和歌山大学教育学部 美術教育学研究室
TEL: 0734-57-7359,7358 (長谷川・永守研直通) FAX: 0734-57-7509,7508 (同)
通信担当 〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学 TEL&FAX: 0742-27-9223 (宇田研直通)

学会誌編集に関して

学会誌編集委員長 柴田和豊

2000年3月末に刊行予定の『美術教育学』21号の編集も校正段階まで進み、ほっとしています。しかし、今回の編集作業を振り返りますと、検討すべき課題もこれまで以上に浮かび上がっており、編集に関する基本方針の再検討を進めねばと思っています。それゆえ検討課題の概略を記しておきます。

今回の査読論文数は31篇で、掲載論文は25篇です。これまでに少なくない応募数で、刊行助成金を得るための提出書類に記した予定ページ数が確保できるか案じたほどでした。本学会誌より10日ほど遅れて締め切った大学美術教育学会誌への応募数が60篇以上であったということを聞き及びますと、様々な思いが去来します。厳しく考えれば、本学会の質的凋落を反映してのことと思えてきます。また呑気に考えれば、夏休みに入るか入らない内の締め切りでは嫌われる、10日程度の差も小さくないというようにも思えます。(常時受付の原則は空文化している。)

そこで、編集の基本方針について、ともかくも質的向上と締め切りの両面から見直しを行ってみようと思っています。

まず、質的向上への対応策として、できるだけ早い時期に2分冊化できるよう研究に取りかかっています。年に2冊出す内のどちらかを特集号とする、あるいは若手会員の冒険精神をサポートする、あるいは実践者をサポートするための号とするなどして学会誌を魅力的なものにできればと思っています。そして、も

う一つ忘れてならないこととして、査読で条件付採択になった投稿論文をじっくりと煮詰めるために、あらためて数ヶ月の執筆期間を保証したいという観点もあります。

他方の締め切りに関しては、数年前まで行っていた8月末の締め切り、いいかえると夏休みを執筆期間としてあてることを可能にするタイムスケジュールに変更したく思っています。やはり、それが現実的なのでしょう。そのためには査読を9月中に行うことになり、8月末の理事会で掲載論文の承認を得るという慣例を変えざるを得なくなりますが、規程上の問題はないはずですし、理事の方々への報告と承認を頂く良き方法を工夫すればクリアできるものと考えています。

ところで、この一文を投稿論文数から書き起こしていることから、私が数にかなりこだわっていると思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、次のことを記しておこうと思います。2分冊にした場合、1冊あたり10篇程度が頃合いなのかもしれません。本学会の会員数と財政規模からすると、現在の400頁のボリュームは少し肥満気味のように映ります。慌ただしく書き、慌ただしく編集、という面もなくはないでしょう。程々のボリュームが良き質を生み出してくれるようにも思えます。

そしてもう一つ念のために記しておきますと、私は学会誌をめぐる状況をもっぱら否定的に捉えているものではありません。例えば査読面を見ましても、好ましい現象が定着してきています。査読者の中には、原稿用紙数枚分の実に丁寧で知的なコメントを書いてくださる方もいます。その印象は年々強くなっています。一定の時間をかけて査読を行うと

という方針は成果を上げつつあるように思えます。問題は、既に記しましたように、投稿者にそのコメントに基づいて書き直すための時間と、さらにあらためて査読者とコミュニケーションをとる手だてが設けられていないことです。ですから、あとは条件付採択となった論文の投稿者にじっくりと加筆訂正するための時間と、査読者と継続的にやりとりする方法が確立されればよいのです。そうできれば、かなりの前進です。

学会活性化の一つの鍵は紛れもなく学会誌が握っています。つきましては様々の意見を御寄せ下さい。待っています。

新入会の員紹介

庶務担当 永守基樹

1999年6月20日に開かれた総務会と8月26日に開かれた役員会において、以下の18名の方々が会員として承認されましたのでお知らせいたします。(順不同)

足立 元 (奈良・奈良県立奈良高校)
笹川辰雄 (新潟・潟東村立南小学校)
梅原才子 (高知・高知市立三里小学校)
石井理之 (大阪・池田市立北豊島小学校)
赤座雅子 (大阪・ミード福祉会館)
都築正敏 (愛知・豊田市美術館)
林 寿美 (千葉・川村記念美術館)
相馬 亮 (福島・福島大学大学院)
上石直美 (福島・福島大学大学院)
岩崎多賀子 (高知・高知大学大学院)
山際正巳 (長野・信大教育学部附属養護学校)
間島博徳 (長野・丸子町立丸子北中学校)
三輪辰男 (三重・津市立西郊中学校)
平川昌宏 (宮城・東北大学大学院)
鹿田敦史 (京都・山科美術研究所)
吉村壮明 (熊本・熊本信愛女学院中・高校)
前田信明 (熊本・熊本信愛女学院中・高校)

高 敬来(コウ・キョンレ 千葉・東京芸術大学大学院)

藪田賢志(東京・NHK学園)

学会兵庫大会に向けての プレ学会開催

越境の時代

芸術教育実践学の視座

大会事務局 福本謹一

去る12月4日(土)に第22回美術科教育学会兵庫大会のプレ学会を芸術教育実践学会との共催という形で開催し、シンポジウムを「越境の時代 芸術教育実践学の視座」というテーマで行いました。

パネリストは美術科教育学会から永守基樹(和歌山大学)、茂木一司(群馬大学)の2氏、芸術教育実践学会(兵庫教育大学連合博士課程の芸術教育実践学分野を母体とした学会)から有道惇(岡山大学)、長島真人(鳴門教育大学)の2氏、及び文部省教科調査官の峯岸創氏(音楽)の計5名でした。

芸術統合の史的背景から、各科教育、教育実践学の構造的展開までの幅広い内容で話し合われました。平成12年(2000)3月27日~29日の第22回美術科教育学会兵庫大会(於:兵庫教育大学)では、同じテーマで継続してシンポジウム等を計画しています。

大会についての詳細は、同封の別紙を参照して下さい。なお、本学会での口頭発表申込者で、会員登録の手続きを済ませていない場合、発表申し込みは無効となりますので御注意ください。(学会費払い込みも学会までに完了しておいて下さい。)

第30回 InSEA(国際美術教育学会) ブリスベン大会報告

筑波大学 岡崎昭夫

1993年8月のモントリオール大会以来6年ぶりに、InSEA(国際美術教育学会)の世界大会がオーストラリアのブリスベン市で本年の9月に開催された。モントリオール大会は28回目であったが、1996年のフランスのリール市における29回大会の中止に関係なく、今年の大会は30回目の世界会議として設定された。

ブリスベン市は、オーストラリアの東海岸、シドニーの北方に位置し、亜熱帯に属する温暖な気候で、南回帰線が通過している。赤道をはさんで沖縄の那覇とほぼ同じ経度の位置のブリスベン市は、クイーズランド州の州都で、南北に海岸のリゾート地を擁し、人口148万人が生活するオーストラリア第3の都市でもある。市の中心部では右ハンドルの車が左側通行で一方通行中心の道路にあふれ、西から東へと蛇行するブリスベン川が市街を南北に分断している。19世紀の初期からその川沿いに開拓が始まったこの市では、今でもその兩岸を連絡する渡し船としての水中翼船が約10分間隔で早朝から深夜まで活躍しているが、その南岸の万国博覧会(1988年)の跡地に建つブリスベン会議・展示センターにおいて大会が以下のような日程で開催された。

9月21日(火)午後から同センターにおいて参加受け付け業務が開始され、同日の夕刻6時からセンター近くのクイーズランド美術館においてオープニングパーティが開催された。美術館では東アジアの現代美術の展覧会が開催されている時期であり、大会の参加者はそれらの諸作品を鑑賞しながら親交を深めた。翌日の22日(水)の午前8時半より同センターで開会式が挙行されたが、式の最初がオーストラリアの先住民のアボリジアのダンスであ

り、「文化と伝統」というこの大会のテーマを強く印象づけようとする意図が認められた。その後、式辞がオーストラリア美術教育学会会長、クイーズランド州政府の文部大臣、ブリスベン市長、国際美術教育学会会長、クイーズランド州政府の芸術担当大臣と続き、最後は10時から11時まで、メルボルン工科大学の教育学部長による基調講演「文化と伝統」で締めくくられた。式辞の途中には生徒によるコーラスやバンド演奏を挟み込んで、参加者を退屈させないように配慮されていた。

同日11時半から、2つの大ホールと5つの小ホールで同時並行的に口頭発表が開始されるとともに、隣接のブリスベン州立高等学校でワークショップが開かれた。この日から26日(日)の午前までになされた口頭発表とワークショップの総数は約190件にのぼり、その内でオーストラリア以外の研究者によるものは約90件であった。最も発表者の多い国はアメリカで29件、次いでブラジル(9件)、ニュージーランド(8件)、日本(7件)、カナダ・オランダ(各5件)、台湾・イギリス・アルゼンチン(各4件)、香港・ポルトガル(各3件)、フィンランド・クロアチア(各2件)であった。1件のみの国としては、イスラエル、ラトビア、スロベニア、ドイツ、ハンガリー、ロシア、シンガポール、韓国、及び中国であった。オーストラリア国内の発表者によるものは残りの約100件であった。

日本の研究者による7件の口頭発表は以下のような題目であった。

川戸美佐子「Creating activities that encourage the development of originality in Japanese children」(22日)

福本謹一「The Development of the Interactive Multimedia Learning Materials for the Art Expression/Appreciation」

寺沢節夫「Applying Method for Art Teaching using through Hidden Order seen in Japanese Art」(23日)

福本謹一・永守基樹「The Development of the Sound-Body Interactive Handheld Interface for the Playful Activities」(24日)

岡崎昭夫「Dow's Conception of Teaching Art」
洲崎早苗「Chances to Extend the Art Expression of the Lower Grades at Primary School in Japan」(25日)

増田金吾「Comparative study on children's pictures in Northern Ireland, UK and Hokkaido, Japan」(26日)。

この大会には、以上の8名の発表者以外にも、多くの方々のはるばる日本から参加されていた。順不同に挙げると、東日本からは、水島廣子、中川織江、佐藤美智子、田中陽子、寺沢陽子、小泉 卓、勝村謙一、清野義光、西日本からは、鈴木真理子、阿部寿文、宇田秀士、東山 明、東山直美、俵 国昭の諸先生方であり、連日熱心に参加されていた。日本からの発表者や参加者の大半が9月24日夕方に市庁舎前に集まり、北岸に面したレストランに行き、午後9時頃まで相互に懇親を深めた。

会期中にInSEAの評議員会が2回ほど開かれ、そこに筆者はアジア地区選出の現評議員、仲瀬律久先生の代理として出席した。現会長による過去5年の活動の総括、次期会長による翌年度から3年間の活動方針などが報告・検討された。9月24日(金)午後4時半からの会員総会において、現会長によって過去5年の活動が総括的に報告され、現評議員の名前を個別に挙げてその貢献に対して謝辞が述べられた。その中で、「InSEA News」の編集と昨年の東京における地区大会開催とに関する仲瀬先生の評議員としての多大の貢献に対して謝辞がなされた。総会の終了前に、紀元2000年からの次期会長と選出評議員が個別に紹介された。

大会最終日の26日(日)の午後1時からは閉会式がなされ、この大会の運営スタッフに対して現会長よりの謝辞が個別にあり、その後、次期会長に選出されたオランダのDiederik Schonau氏より今後3年間の活動方針が述べられた。特に、国際美術教育学会誌の創刊に向けて計画、地区大会の予定(来年にはポーランドで、再来年にはスウェーデンで)、及び次期の世界大会の予定(2002年8月20日から25日

までニューヨーク市で開催)などが表明され、会員諸氏のさらなる研究活動の推進と同市での再会を期して、大会が終了した。

モントリオール大会に続いて、筆者としては2回目の世界大会への参加であったが、両大会を比較すると、今回の大会は南半球でのどこに行われた印象を持った。ここでは気候や年間の行事が北半球のそれらとは反転している。大会期間中は新年度の学期に向けての春休みの2週間に当たっていた関係からか、市街や南岸は子ども連れの人々でにぎわっていた。参加者は当初は1500名が期待されていたものの、実際はその半数くらいで、オーストラリア国外からの参加者はさらに少なく150名を下る人数かと推測される。前回大会が8月で参加者が約900名で、参加国が44であったことからすると、北半球の人々にとって開催時期がそぐわなかったのであろう。この大会は期待したほどの規模にはならなかったが、落ちついた雰囲気でも美術教育における文化と伝統の問題を冷静に再認識し、芸術文化を通して意義ある学習課題を提示できることがこの大会によって明示されたのである。

《御詫びと訂正》

前号にあたる通信34号では、誤植が多く、玉稿を御寄せいただいた各氏に不快な思いをさせてしまい、申し訳ありませんでした。各氏の原稿には誤りがなかったにもかかわらずメール送信の間に文字化けを起こしていたようです。

今後このようなことが続かぬよう一層気を引き締めて編集にあたっていきたくと考えております。以下に、訂正箇所を示しますので前号とあわせて御訂正下さい。(宇田)

* 宮脇理氏原稿(2頁目)

左段/上から4行目 1614年 1914年

* 堀川紀夫氏原稿(8頁目)

左段/下から17行目 校舎美化 校舎美化、
下から13行目 図工科の機業 図工科の授業
右段/下から14行目 適切な梶所 適切な
場所、下から9行目 美術能 美術館

教育研究における言葉の問題と教育言説

山本朝彦（鳴門教育大学）

社会学および現代批判の思想の分野では、さまざまなデータに対する分析をもとにした現象の解読や状況の解釈が行われ、場合によっては概念の変更や創出が行われる。現実の事態をどのように理解すれば的確な判断に導かれるのかを様々な手法で検討する。このような方法論により、現代社会に対する批評性や建設的な提言もこの分野では比較的自由に行われているようだ。

社会学出身の研究者である豊泉周治は、社会学と現代批判の哲学をベースに『アイデンティティーの社会理論』（1998）のなかで、主として消費社会に特有な現代人の心理を巧みに描き出している。「個性」「アイデンティティー」「モラトリアム」「ライフスタイル」など、一見、わかっているようで突き詰めて考えると何が何なのか分からなくなってしまうような用語を社会的な組織や個人の関係性に関する考察によって、整理し、滑らかな批評の文脈に繋げている。けっして、今までに無かった概念や理論を創出したものではないが、現代社会に生きる人間の心理と社会を構成する組織の特性や制度をトータルに整理してくれた功績は大きいと思う。言葉の意味の変容という現象を含め、日常の会話に定着した用語の意味と原義である理論的な意味を比較し、なぜ、その言葉がこの時代に広く使われているのかを社会的な要因との相関において捉える手法は示唆に富むものである。もちろん、このような意味でその功績を評価できる研究者は数多く存在する。中西新太郎、吉見俊哉らが教育にかかわる現代社会論を展開しており、汐見稔幸や苅谷剛彦が現代の教育学として現代

社会の文化状況を考察している。

研究上の言葉の問題を考えると、理念と現象を語る言葉の違いについても触れておく必要がある。教育社会学の川野洋は、教育学の言葉について、次のような経験を紹介しているが、言葉の捉え方のうえで興味深い。

「以前ある教育学者の論文を読んでいたことがあるのですが、おもしろくない。読むのをやめようかとおもっているときに、あることに気がつきました。この学者の論文には『すべきである』という言葉が頻出するのです。[中略]この論文は現実を分析するかわりに、ひたすら理想と理念を語っているのです。」（『社会学がわかる』1996）

教育にとって、その理念と目的を言語によって確定し、実現可能な理想的教育形態を思い描くことは絶対的に必要な知的営為であるが、そのような言語活動だけでは現象を捉える認識には繋がらない。何々すべきという論述と何々であるという論述は、それぞれ普遍的な目的についての考究と現状を的確に認識するための思索という次元の異なる世界に位置している。しかしながら、現状の打破のために教育理念の考究が先導的な役割を担うという意味で現実に寄与することも、現状についての認識がきわめて当を得た現状改革のためのストラテジーを用意し、教育理念への漸次的な接近の様相を見せることもありえるのであろう。要は理念を語る言葉と現象を分析する言葉のちがいを見定めつつ、両者に妥当な関係を結ぶ努力を行うことである。

昨今、流布している教育言説の問題は、無反省に「すべき」と「である」を結びつけ、混同することによって、理念無き教育方法論の優先主義や現代社会にたいする分析を伴わぬ学校再生論が跋扈するための培養土を耕していることである。教育課程論抜きの教育方法論の洗練（その逆もありえる）が提唱されたり、現代の産業構造・文化形態への分析を欠いた文化の継承論が声高に叫ばれたり、「ともかくやってみよう」という試行錯誤を良しとする教育実践が推奨されたりするのは、いずれも、文字通りセンスを欠いた思考の停

止状態を意味している。そのような言説は一見説得力を持っているかにも見えても巨視的な時間の流れのなかで、淘汰されるはずではあるが、教育に混乱や混迷をもたらす可能性はおおいにある。

誤解を招きたくないのに急いで言葉を続けるが、現代の教育改革にたいして暗に否定し批判する意図からこのような論を展開しているわけではない。むしろ、現代の学校教育の閉塞感がどのような現代の社会的要因によってもたらされているのか、そして、どのようにしたら、学校知と呼ばれる知識を質的に転換できるか、さらに、子どもの自発的・主体的な認識の深化にとって教師の役割はどのようなものであるかなどという問いにたいするひとつの現実的提言として、教育課程の深部にまで踏み込んだ改革案が提示されたという認識である。問題なのは、改革の機運のもとに飛び交う教育言説のなかには、先に掲げた何となく学術的ではあるが具体的な事例や現象に照らしてみるとよくわからなくなる言葉や「すべき」と「である」の混同などの言葉の乱用が数多く見られることである。

現代の教育的言説を美術教育研究の成果を踏まえて眺めてみたとき、最も気になるのは「問題解決的な学習」と「(子どもの)生活・経験の重視」という言葉である。いまや、どちらも教育の世界の常套句となり陳腐化しており、同時に公共化され教育の常識として機能している言葉だが、考えてみると意味が多義的で掴みにくい。「(子どもの)生活・経験の重視」をすべきだから、「問題解決的な学習」をするのか、それとも現代社会において問題解決的な能力を必要とするから生活・経験の重視が求められているのか、このような関係についても掴みにくい。しかしながら、多くの教育関係者がこれらの言葉を支持している以上、その意味を明確化し、きちんとした論理的空間に位置づける努力が求められている。

問題解決能力の育成が基礎的な学力無しに促されるはずもないという「常識」の形成によって、かつての「系統学習と問題解決学習」は止揚されたかにも見えるが、実は「学力」とは

何かという根本的な問題提起がなされときから、この常識の足元はふらついてきたはずである。その意味では学力の定義の見直しを契機にして、問題解決ということの意味を再び吟味する必要があるということである。学力の問題については、美術教育では視覚や触覚などにかかわる表現・鑑賞能力にかかわるリテラシーの修得と表現・鑑賞を契機にする自己像・他者像の探究の両側面において他の教育領域とは異なる教育観を形成してきたはずである。にもかかわらず、学力という言葉の客観的評価の側面に目を奪われて、その教育論の中に学力概念を明確に位置づけられなかったことを問題解決的な学習とは何かという問いが浮き彫りにしている。

もうひとつの生活・経験の重視に関して言えば、デューイの『経験としての芸術』(1934)に見られる経験という言葉の意味および拡大された芸術概念について批判的に検討を加えておくことが必要である。芸術的表現活動にたいする関心が欠如していた戦後日本の経験主義的カリキュラムが系統学習や科学主義に対して座を譲ることはむしろ当然の歴史的帰結であった。『経験としての芸術』を参照しないままデューイが援用されていたのである。今後、日本の教育実践が生活・経験の重視を唱えることによって教育の充実を図るというならば、経験・体験から直ぐに知識を抽出する短絡的学習ではなく、経験を対象化し表現する形式の創出を求めるデューイの表現観を無視してはならない。

デューイそのものの言説の考究だけではなく、その思想を現代の芸術状況あるいは教育実態から捉え直した研究、たとえば、エーコ『開かれた作品』(1997)などから、デューイの表現観について考えてみたいと思っている。また、アイスナーのデューイにたいする評価についても検討する機会を持ちたいと考えている。

Mail Box

このコーナーでは、会員の方々からの便りを掲載します。学会や美術教育に関するご意見等をお寄せください。

子どもにとっての総合 ・ 教師にとっての総合

大泉義一(東京学芸大学附属竹早小学校)

1. 自問

最近、実践を通じた美術教育研究に取り組む中で、これまでは当たり前のように行なってきたことに対して自問する機会が多くなりましたが、その内容は大きく2つに絞られることがおぼろげながらにわかってきました。

それらに共通するキーワードは「総合」。

2. 子どもにとっての総合

「総合」。この言葉は、まだその具現化が先のことであるにもかかわらず、すでに聞き飽きた感のある言葉ですが、うわさ先行とも思えるその「総合」の定義には、下に示すようなカテゴリーが存在していることに気づきます。

現代社会の要請に基づき、教科学習では覆いきれないテーマを扱う(「環境」「国際」などの「テーマ総合」)

異なる教科間の内容をインタラクティブに扱う(いわゆるクロス・カリキュラムに近いもの)

子どもの興味、関心にもとづいて活動を立ち上げていく(「はじめに子どもありき」)

しかし実践する上で中心理念をどこに置くかは、取り組んでいる学校に任されているのが現状であり、どれが正しくてどれが好ましくないということはないようです。

私の勤務校では、10年以上前から「総合」を主題にした研究に取り組んでおり、私も2

年前から参加させてもらっています。本校の「総合」は同じ敷地内にある附属幼稚園との連携に根差したものです。幼稚園では遊びを中心とした保育がなされているのですが、そこで見られる子どもたちの生き生きとした活動性や意欲には目を見張るものがあります。そこで、幼稚園と小学校を子どもの発達に即してなだらかに接続するという目的のもとに、本校の1、2年生の教育課程全体を「総合活動」で覆ったのです⁽¹⁾。

その「総合活動」では教科を廃し、その週の時間割は学級の手どもと教師で話し合って決めます。そこでは子どもたちが自ら求めて行なう学びの姿が認められます。

ところが2年生からは音楽と図工だけが専科の時間として保証されており、唯一教科学習の時間が存在しているのです。そうした状況で行われる図工の授業では、次のような場面に遭遇することがあります。

* * * * *

「先生、今日は何やるのー？」子どもたちが次々に図工室へやってきます。私が黒板を示すと、子どもたちは大きな声で読んでくれます。「わ・た・し・の・た・か・ら・ば・こ」「そうです。今日はみんなに持ってきてもらった箱を自分の大好きな宝箱にしましょう。」

そうして子どもたちは図工室の中をはじめ、学級教室、校庭へと宝探しを始めました。そ



『わたしのたからばこ』

のうち、「ほら先生、棚の中にビー玉見つけちゃった。」「ぼくのお気に入りの消しゴムを入れよう。」と、次々に宝物ゲットの報告がなされました。

そのうち箱の中はその子にとっての宝物で埋まっていき、単なる紙箱はその中の宝物に合わせて楽しい装飾が施されていくのでした。そんな様子を見るにつけ、子どもたちのまなざしの鋭さに脱帽してしまいます。ところがその日、深く考えさせられる場面に遭遇したのです。

A君が「先生、ちょっと来て!」と私の手を引いていきます。何かと思いついていくと、校舎の裏手にまわったところに彼の宝箱が置いてあります。「何を見つけたの?」と開くと、彼は誇らしげに蓋を取ってみせました。中を見ると、黒々としたものが入っています。よく分からず彼の顔を見ました。すると、「霜柱があったよ。見て、とってもきれいでしょ。」と、霜を顔の前に近づけるのでした。見ると、びっしりと霜柱の美しい結晶が並んでいます。

一つ一つが陽の光を受けてきらきらと輝いています。彼の顔を見ました。彼の目もまた、同じようにきらきらと輝いています。私はその時、自分がその年初めての霜柱を見たことに気づきました。私は自分がこの活動に意図したことなど、なんてちっぽけなものだったのだろうとさえ思いました。「すごくきれいだね。とけちゃう前にみんなに見てもらおうね。」と言うと、「大丈夫だよ、黒い紙をかぶせておくから!」と自信満々です。ここで私は「それじゃあとけちゃうよ。」と彼に教諭することはできませんでした。ちょうどここで終了時刻になったので、幸い図工室にいる友達に見せることができました。みんな「わーきれいだねー。」と近くに寄って見たり、発見場所を尋ねたりしています。彼は胸をはって、本当に嬉しそうです。

その後、彼の宝箱はロッカーの上に置かれていました。もちろん、すでに「霜柱」という物体はとけてなくなっていました。しかし、彼にとっての宝物は消えてしまったわけではありません。翌週の授業で水浸しの箱を発見し

た彼は、その翌日から霜柱についてを自ら詳しく調べるようになったのですから!

* * * * *

A君は附属幼稚園から本校に進学してきました。そして本校の「総合活動」によって育ちつつあります。本校の「総合活動は、大人の都合のよいように教科によって分断されたものではなく、子ども本来の総合化された知から出発するものなのです。彼が見せてくれた、教科が発端となりつつもそれに限らず広がっていった発見、追及過程は、バナキュラーな学びの姿を私に示してくれたといえるでしょう。

このように見てくると、教科、そしてそれによって成り立っている現在の学校教育の枠組みは、今一度子どもの世界に立ち返ってみる必要があるのではないかと思います。これまでは当然のように近代の文化的価値に立脚した内容だったわけですが、その意義を問われるべきであることをA君は示してくれているのではないのでしょうか。教科教育研究においても、そのような地平を出発点とする必要があります。

3. 教師にとっての総合

私を自問へと誘い込む今一つの要因は、子どもと専科教師としての私の関係にあります。

* * * * *

その時私は6年生を対象に、全判の京花紙を用いた造形遊びの授業を行っていました。子どもたちはその材質に全身で浸りながらダイナミックな活動を展開しました。授業参観していた教育実習生をマネキンにして衣装をつくりだす者、こまかくちぎって頭上に投げ上げたり、その布団に埋もれてスヤスヤと眠ってしまう女の子グループ。大きな飾りを教室中に設置し、空間を変容させた子。どの子も各々の持ち味を生かして活動に取り組んでいるように見えました。

その中で、せっかくの大きな紙を小さくちぎり、所在無げにしているB子の姿がありました。B子は、図工大好きっ子で、いつもは自ら



『体よりも大きな紙で...』

進んでのびのびと表現している子です。どうしたのかと尋ねても「今考えてるの」と答えるだけで、他の子どもたちが思いっきり活動している雰囲気の中であって、彼女はその大きな材料に困惑しているようにさえ見えました。もちろん色々な支援を試みましたが、結局その子は小さな人形をつくただけで終わりました。私はそのことを授業中に見取った事実として、「全身を大きく使った活動を好まない」というようなメモを取りました。今後の活動でこの見取りが支援に生きてくればよいと願ったのです。

* * * * *

しかし、この見取りは大きく間違ったものでした。

授業の後B子の様子を担任教師に告げました。するとその先生は大きく肯き、その日B子に友達とうまくいかないことがあったことを教えてくれたのです。

私はショックを受けました。さっそく彼女

がつくったものを図工室まで見に行きました。小さな人形。それは2体。よく見ると2人はその小さな手をつないでいます。そうです。彼女は立派に自己表現していたのです。小さく、ささやかではありますが、彼女なりの大切なメッセージが込められていたのです。

この経験は、単に私の教師としての力量不足ということだけではなく、子どもを“造形”という一側面のみで捉えようとしていた自分に大きな危険性を感じさせるものでした。専科教師となって2年。中学校で教師をしていた時には学級担任、部活動顧問といった教科以外での子どもとの全人的な関わりがありましたが、それも希薄な中での断片的な子ども理解。教科教育研究も同様なことが言えまいか。ふと自問してみたのです。

4. これから

ある新聞⁽²⁾に日本臨床心理士会が臨床心理士誕生10周年の記念大会を開催したと記されていました。その記念講演で、当会の会長である河合氏は、医師と臨床心理士を比較して、次のように述べたといえます。「医師の専門知識は、数量化され、客観化されており、近代科学そのもの。患部や臓器を、体全体と切り離して扱うことで成り立っている。これに対して臨床心理士は、人間を心も体もまとめて、全人的に取り扱う。だからこそ、近代科学が切り捨ててきた心の問題を取り扱うことができる。」

子どもと全人で付き合う中でのみ、その子の成長の道筋は見えてきます。その道筋の中で、造形活動が子どもにとって、どのように有効であるのかを実践的に理論化することが、これからの私の目標です。

【註】

(1)「学びの場をひらく」—心身の成長発達に即した教育課程の創造—と題して、「総合活動」を核とした教育課程の開発に取り組んでいる。

(2)朝日新聞 平成11年11月30日夕刊

書評&文献紹介

H・マイヤー著(原田信之,寺尾慎一訳)『実践学としての授業方法学—生徒志向を読みとく—』北大路書房,1998

堀 典子(横浜国立大学)

教員養成に携わってからはや30年近い時が過ぎようとしている。学生達に「教科の内容と方法を勉強するように」と言い、私みずからも「美術教育の内容と方法」を研究していると宣言してからどれ程の時を経たことだろう。学生達は「内容はわかるが、方法はわからない。何が方法なのかもわからない。」と言う。「大学では内容は学ぶが、方法は学ばない」と言う。「教育学などの授業では主として哲学的あるいは思想学的研究についての講義は受けるが、授業方法そのものについて学んだという意識がない。」と言う。

日本の大学の現状では「実践的指導力の基礎を身につけることが望ましい。」とは言っているが、実際には主に教科の内容を深め、授業法などの教科の方法は、現場に行ってから個々の教師が模索しつつ自分でみつけていくということになっている。しかし「教科の方法」は、個々の教師が自分でみつけてゆくことが出来るほど簡単なものであろうか? 「授業方法」というテーマは大学で学問として扱われる魅力がないのであろうか?

日本の教員養成にはこの「教科の方法の学習」という大変重要な部分が欠落しているのだということに常々心を痛めているのだが、しかしどのような研究を「教科の方法の研究」というのか、またそれを「どのように学生達に学習させればよいのか」ということについては、私自身明解な答を持っている訳ではな

い。「教科の内容と方法」という大きな悩みを解決しないまま、はや停年後の日々について考えるこの頃であるが、昨年北大路書房から出版されたH・マイヤー著原田・寺尾訳「実践学としての授業方法学」は遅ればせながらであるが、私の疑問に答えてくれる本であるということがわかってきた。

この本の著者であるヒルベルト・マイヤー氏は現在58才でドイツのオルデンプルク大学で一般教授学、授業方法学、学校教育学を専門領域としている教授である。オルデンプルク大学はオスナーブリュック大学と共に、1974年から、実践に関連した導入教育を大学での学習に含めたということによって教員養成を一段化したという点で、日本の教員養成にとって参考になる大学ではないかと思われる。オルデンプルク大学は教育界に常に話題を提供し、ドイツの教員養成課程に在学する学生達にとって最も人気のある大学である。

1987年にハンプルクで開かれた第26回国際芸術教育会議(INSEA)で新ミューズ運動ともいえる情熱的な基調講演を行ったプリンツ・ルドルフ・ツァリッペ教授もオルデンプルク大学の教官であった。彼は現代社会の弱点



をつき人間の成長発達を熟慮しなければならないという講演をし、大会場をうめた参加者達から熱狂的な支持を得たのである。

オルデンプルク大学で現在博士論文を執筆中のクラウディアという友人が3月に私を訪ねてくるというのであるが、彼女が言うには、オルデンプルク大学の教授達は学生達が必要としている研究をするように心がけ、講義録やゼミの資料のコピーを学生達に渡し、内容や付け加えること、疑問点、言いまわし等について学生達と共に考えて書き直したものを最終的に本として出版すると言う。多分ヒルベルト・マイヤー教授の「授業方法学」というこの本も、彼の講義やゼミで扱った内容であり、私の友人クラウディアが言うような方法によって完成された本なのであろう。

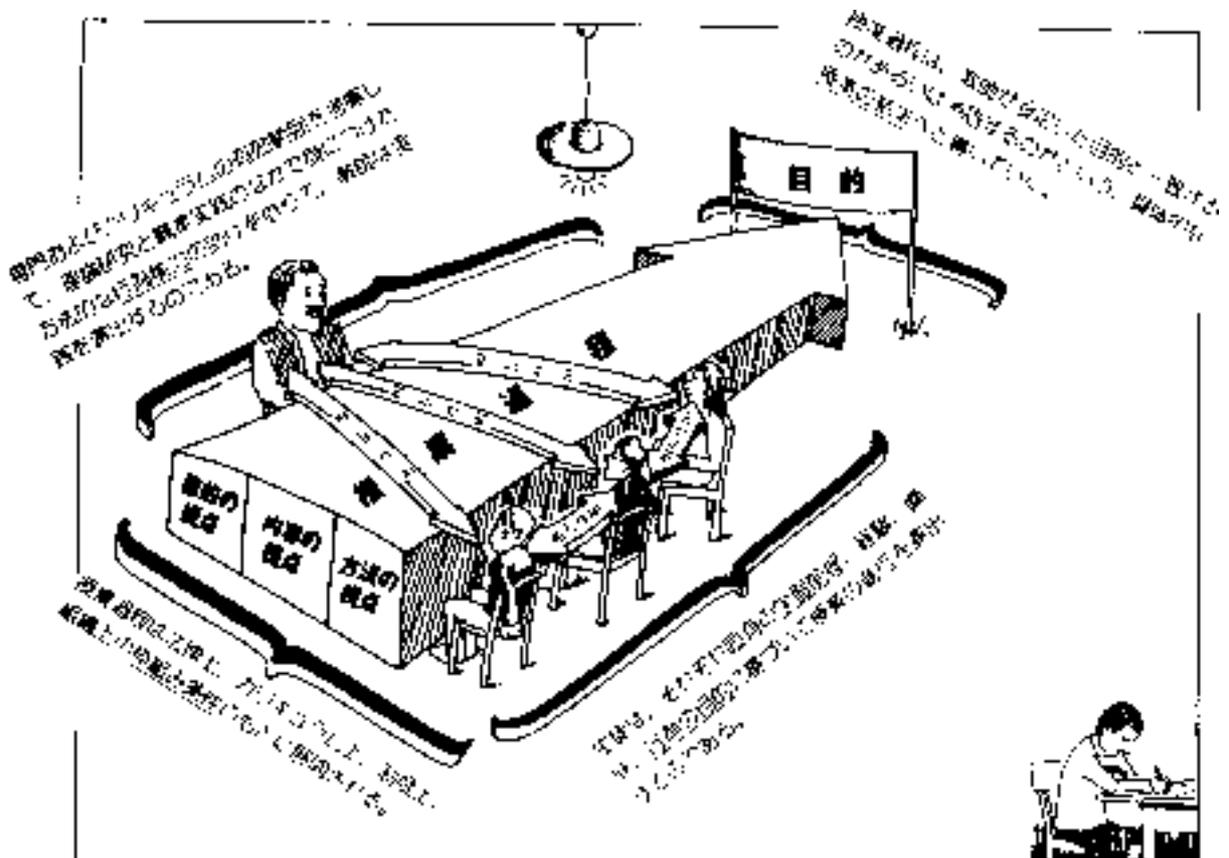
日本の学生達もドイツの学生達も「授業の方法についての学習」がおろそかにされていると長いこと感じていた。多くの著名な教育学者達も「授業の方法」を研究することが重要であるということを繰返し述べてはいるが、それを具体的に研究した人は今までいなかった。まさにその「授業の方法」を主テーマとし

て具体的に考察し学問的研究にまで高めたのがこの本である。

そういう意味で教員養成に携わる学生達や現場の教師達が待ち望んでいた内容なので、ドイツで1987年に出版されてからすでに7版を重ね10万冊売れたベストセラーである。上巻は「授業方法学理論編」で約270頁、下巻は「授業方法学実践編」で約460頁である。

今回翻訳されたのは、上巻のみである。北大路書房に電話して聞いてみたところ下巻の翻訳は2年先になるとのことであった。私は上巻を読んでみたがけっこう難しかった。本の内容の紹介は長くなるので、後日、別の機会に行いたい。それにしても翻訳という言語の問題があるとしても、もう少し読みやすくなければ、ドイツで10万冊も売れたということが信じられない。多分下巻の実践編と併用して読めばずっと解りやすいのかもしれない。

本の随所随所に入っているマイヤー教授や仲間達によって描かれたイラストは心が和むし、本の内容を的確に伝える役目をはたしていると思われるので、ここにクローズアップして掲載しておきたい。



情報コーナー

第22回美術科教育学会兵庫大会について

* 会期 2000(平成12)年3月27日(月)~29日(水)

* 会場 兵庫教育大学 〒673-1415

兵庫県加東郡社町下久米 942-1

* 大会事務局(は大会会長)

辻田嘉邦 TEL:0795-44-2253(研究室直通)

福本謹一 TEL:0795-44-2255(研究室直通)

芸術系事務局 TEL:0795-44-2253

FAX:0795-44-2259

投稿原稿の募集について

「書評・文献紹介」「Mail Box」「研究ノート/実践報告」の各コーナーへの投稿を募集しています。原稿の字数等は以下の通りです。

1頁にまとめていただく場合「20字×76行(最大1,520字)」以内

2頁にまとめていただく場合「20字×162行(最大3,240字)」以内

* 文字数が を超える場合は、1頁当たり「20字×86行」を加えてください。

* なお、写真・図版などの掲載も可能です。

その際は左記の文字数から図版分をおおよそで結構ですので減じてください。

[註]編集ソフト(PageMaker6.5J)の関係で、実際のレイアウトは左記の字数、行数とは異なる場合がありますので、ご了承ください。

なお、次号(No.36)の発行は3月上旬を予定しています。次号向けに投稿される方は、原稿を2月15日(火)までに下記通信担当及び世話人宛に、E-mail、郵送等でお送り下さい。

事務局通信担当/宇田秀士

〒630-8528 奈良市高畑町 奈良教育大学

TEL&FAX:0742-27-9223(研究室直通)

E-mail:udah@nara-edu.ac.jp

学会通信世話人/新井哲夫

〒371-8510 前橋市荒牧町4-2 群馬大学教育学部

TEL&FAX:027-220-7316(研究室直通)

E-mail:arai@edu.gunma-u.ac.jp

会員に関する情報提供のお願い

会員に関する情報(出版、異動、住所変更、受賞などの情報を随時掲載します。情報検索の公平さを考慮し、掲載内容については自己申告を原則とします。

掲載を希望される方は、掲載を希望する内容等を上記事務局通信担当又は世話人宛に、E-mail、FAX等でお知らせ下さい。

学会通信N0.35をお届けします。昨年12月発行のNo.31より編集体制を一新し、丸1年が経つこととなります。

親しみやすい会報を目指して、これまで5号の通信を編集、発行してきましたが、いかがでしょうか。ご意見やご要望を含めた忌憚のない批評をお聞かせいただければ幸いです。

企画コーナー(「書評・文献紹介」「Mail Box」「研究ノート/実践報告」

等)は、一方通行に陥りがちな通信を、可能な限り双方向的な情報交換や会員の相互理解の場にしたいと考えて設けたものです。

幸い、これまでたいへん興味深く充実した原稿を掲載することができました。お忙しい中貴重な原稿をお寄せいただいた会員諸氏に改めて感謝します。

編集後記

丸1年といえば、昨年12月14日に新しい学習指導要領が告示されて早1年。その間、『小学校学習指導要領解説 図画工作編』の発行(5月)、移行措置に関する告示(6月)、『中学校学習指導要領解説 美術編』の発行(9月)が行われ、また、9月25日の朝刊(朝日新聞)には東京都品川区が小学校選択の自由化(通学区域制の規制緩和)を決めたとの記事が掲載されていました。

目まぐるしく動く制度と学校教育をめぐる環境、そして美術教育の現在と未来...。20世紀最後の1年である2000年が、美術科教育にとって希望を抱ける1年となるよう期待したいと思います。

次号の発行は、第22回学会兵庫大会を間近に控えた3月上旬を予定しています。どうぞよいお年をお迎えください。(新井)